

2025年12月14日 第二礼拝 アドベントⅢ ～喜びの灯～

説教題『いと高き方の力に包まれて』エレミヤ書32章26～27節、ルカ福音書1章26～38節

主任牧師 加藤 誠

「見よ、わたしは生きとし生ける者の神、主である。わたしの力の及ばないところが、ひとつでもあるだろうか。」(エレミヤ書32章26節)」

「天使は答えた。『聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。』」(ルカ1章35節)

今年のアドベントを前に「私たちの心に思い浮かばないことを起こされる神」に期待して祈っていきましようと言らせていただきました。使徒言行録13章で、アンティオキア教会からサウロとバルナバが異邦人伝道に派遣された際、聖霊はこう告げました。「わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせなさい」と。しかしながらバルナバとサウロがチームを組んで神の仕事をするなど、いったい誰が「前もって」想像できたのでしょうか。主なる神は驚くべき方、「私たちの心に思い浮かばないこと」を「前もって」準備をされている方なのです。

今朝のクリスマス物語でも、天使がマリアのもとを訪れる「六か月前」に、天使はエリサベトの夫ザカリアを通して受胎告知をしています。エリサベトとマリア。この二人への計画は、人々の心に思い浮かびもしない「六か月前」いや「そのはるか前」から神によって周到に準備されていたのです。

それにしても、日常の生活に天使が突然あらわれて、ふつうの人間には理解不能なことを告げられて、それまで思い描いていた人生設計とはまったく別の道に招き入れられていく。このときエリサベトとマリアがどれほど戸惑い、不安と恐れに襲われたことか、想像に難くありません。実は聖書には「なぜ、いま、わたしなのですか？」という突然の召命を受けた人たちが大勢出てきます。アブラハムも、モーセも、サウルも、ダビデも、エレミヤも、ペテロも、パウロも。神の召命はこちらの都合などお構いなしに届けられます。最終的には「神さまの計画はすごい！」という賛美に導かれますが、召命を受けた時は「ただただ驚きと戸惑い以外ない」ことが多いのです。けれども神は支えや助けを必ず用意して、その召命を励まし導いてくださいます。

エリサベトとマリアは二人ともリスクのある大変困難な仕事を神からいただきますが、神はエリサベトのためにはマリア、マリアのためにはエリサベトを立てて、二人が互いに支え合い励まし合って困難な仕事を最後まで担えるように「前もって」準備してくださっていたのです。

二人の受胎は「大きなリスクを背負う」点で共通していました。エリサベトの受胎は「肉体的にありえない」ことであり、マリアの受胎は「律法的にあってはならないこと」でした。エリサベトは超高齢出産という肉体的なリスクを引き受け、マリアは

律法的裁きというリスクを引き受けねばなりませんでした。多くの場合、妊娠は本人にとっても家族にとっても大きな喜びの出来事ですが、エリサベトとマリアの場合、手放しでは喜べない部分の方が大きかったのではないのでしょうか。周囲の人々からの好奇な視線と無責任な言葉で、彼女たちの心は深く傷つけられることもあったことだろうと想像するのです。

しかしクリスマスは、逆風が吹き荒れるような状況において「いと高き方の力に包まれて」歩む幸いと喜びを私たちに示します。今朝の受胎告知の場面で最も力強く迫ってくるのは天使ガブリエルの「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む」という言葉でしょう。マリアは「お言葉どおり、この身になりますように」と信仰をもって応答していますが、このときマリアが自分の置かれた状況と自分の力だけを見たならば、とても天使の言葉を受けられなかったと思います。しかし天使は「いと高き方の力があなたを包む」「神さまが責任を取ってくださる。大丈夫!」と告げた。そして「あなたの親類のエリサベトも高齢でありながらもう六か月になっている」と告げたのです。人生の大先輩であるエリサベトにも同じような天使のお告げがあり、その召命を受けて立っている。聖霊の助けと全能の神の支え、そしてエリサベトの存在と信仰がどれほどマリアを力づけたか。その大きな励ましに包まれて、マリアは「お言葉どおり、この身になりますように」と応答したのでした。

そして今朝の場面で注目したいのは、マリアもエリサベトも自分たちの喜びが満たされる道ではなく、神の喜びがあふれる約束の道を選び取ったということです。突然の天使の訪問によって彼女たちの人生設計は大きく狂いました。「そんなつもりではなかったのに!」と、どれだけ叫びたかったことでしょうか。しかし二人は「神が偉大なことをなさること」に自分の人生をささげる決断をしました。クリスマス物語、救い主の誕生は、この二人の女性の信仰の応答なしには成り立ちません。ただ、その彼女たちの信仰に先立って、神の励ましと力強い約束の後押しがあったのでした。私たちの信仰の前に、神の決断と約束があるのです。先ほど読んだエレミヤ書 32 章は、バビロン捕囚によって荒地になることが予想されたアナトトの土地を、エレミヤが購入した時に神が語りかけた言葉です。「見よ、わたしは生きとし生ける者の神、主である。わたしの力の及ばないところが、ひとつでもあるだろうか」。イスラエルの国がバビロニアによって滅ぼされ、アナトトの土地は荒地となる現実が目の前に見えていました。しかし、神の約束は必ず実現し、再びイスラエルはこの地に戻ってくる。目に見える現実で判断してしまうのではなく、目に見えない神の約束に信頼することの幸いと喜びを、このエレミヤ書の言葉は示しています。私たちもまたクリスマスを前に、私たちの信仰や働きに先立つ、神さまの力強い約束を受け取っていききたいのです。そして「いと高き方の力に包まれて歩む幸いと喜び」に与っていきましょう。